

樫の若木賞を受賞して

矢野 将寛

私は、本年度3月に大阪大学大学院博士課程を卒業し、現在、センサや画像処理機器、各種制御・計測機器等の製造・開発をしている株式会社キーエンスという企業に入社し、新入社員として社会人のキャリアを歩み始めたばかりの矢野将寛と申します。今回、第10回樫の若木賞を受賞し、この受賞に関して会報への寄稿の依頼を頂きましたので、受賞理由である「博士号の取得」について、特に論文への「表現」という切り口で拙文ですが寄稿させていただきます。

■ 樫の若木賞への応募

樫の若木賞への応募は、大学院で博士号を無事取得できましたので、募集要項の応募有資格者にそれを評価して頂けるとされていたこともあり、是非と思い、手を上げさせて頂きました。

大学院博士課程後期に在籍中に英語論文を3本雑誌に投稿するのが卒業の条件でしたが、実は2年弱、論文が1本も出せなかった時期がありました。正直、この頃は精神的に苦しい時期を過ごしました。この研究の分野は、何が正解かわからない世界なので、どうすればいいのか、分からなかったのが一番の悩みでした。卒業するまでも、卒業してからも、世の中、何が正解なのか分からないまま、というのが現在も偽らざる心境です。

■ やり遂げた前と後での自身の心境の変化

受賞理由である「博士号の取得」について、心境の変化というのとは少し違うかもしれませんが、取得前と取得後について、その中心となった論文への「表現」という切り口で思ったことを記します。

◎取得前

自分が考え、価値があると思っている研究は、他人も価値があると認めてくれる、と思っていました。既に論文として発表されていることは正しいものだと、自分も正しいことをすれば正当に評価してくれる、とあって研究に向き合い、その結果を、今思うと自分勝手に論文に著していました。

◎取得後（取得に至る途中も含めて）

価値観や研究結果の評価は人それぞれなので、自分の研究に興味を持って向き合ってくれる人は基本的に少数しかいなく、論文内容に否定的な人もいるし、何を基準にして信じればいいのかわからないので基準は自分で創るものと感じるようになりました。また、研究者の仕事は論文を書くのも大事ですが、引き立て、力添えをしてくれるような、根回しと言ったら語弊がありますが、ネットワークを作ることも大事だという体験がありました。

科研費など研究資金を獲得しなければ研究できません。なんでも自分の好きなことを論文やそれらの申請書に書いていても業績も資金を獲得できません。論文の査読者や、研究資金の審査員に理解して頂く、この研究の新規性や有効性をしっかりと説明し、そ

れらの方々時間がとってじっくりと自分の論文や申請書と向き合ってくれるような書き方をしないといけない、ということをも身をもって知りました。

■ 当時どのような気持ちで過ごしていたか

そういう意味で、相手に自分の考えていることを文章にして伝えることは非常に難しいということを経験しました。当時、思っていたことを箇条書きします。

- 論文投稿は審査員の質によって審査基準が変わるため、論文の価値を測るのが難しい？ そのような環境で研究の世界が動いていて問題ないのか？ 何を信じればよいかわからない…
- みんな正解が分からないまま研究しているなら、何をもちつて自分の研究が批判的にみられているのか分からない。もちろん自分が間違っている可能性もあるが、相手が間違っている可能性もあるのでは…
- 論文審査で躓く、リジェクトされるのは自分の研究に価値がないからなのか？ 書き方が悪いのか？ 何をやっているかよりも、どう伝えるかが大事なのか？
- 結局、審査員に気に入られる書き方をするのが良い論文なのか？ 論文を書くのが目的になってしまって、研究することによって達成したい目的が見えなくなかないか？ …等々。

■ 困難な状況をどう克服したか

克服したかどうかは、今でも分かりませんが、当時とはとにかく論文を書くときは、分かりやすく書く、審査員の業績や多数の意見・評価基準を念頭に置きながら、自分が大事だと思うことを繰り返し、繰り返し、何回も書くことを心がけました。

加えて、対外的に話すとき、または書いて発表するときは「自分が正しい」と自信をもって発表するように心がけました。時には、(失礼ながら…) 聴取者や評価者は、研究結果の詳細な内容よりも話し手の雰囲気(熱意や確からしさといった表情)で判断していることも多そう、という先輩からのアドバイスも参考しました。(自分の経験でも、そういうときがあります)

でも、「自分が正しい」と発表する前には、自分一人で「自分は本当に間違っていないか」「研究のプロセスに見落としがないか」と常に批判的に考え、その結果、「十分検討した。今現在はこう考えている」という内省プロセスを経て、自信をもって発表するようにしました。

さらに、学会の研究活動や発表会場で、共著者や研究内容を理解してくれる仲間を増やして、自分の研究に勢いがあることを示すように心がけました。

■ これからの目標や新しいチャレンジ

今春、自分の研究していたこととはあまり関係のないことをしている会社に入社しました。この会社に就職することを決意した理由は、別の機会にでもお話できればと思いますが、当面の目標は、少しでも価値の高いものを作って社会の役に立つことであります。価値をどう測るかは、まずは単純に、作った商品がどれだけ売れたかで測れるものだと思っていこうと考えています。高く売れるほど、たくさん売れるほど、価値が高い

のだと、信じていこうと思います。

そのためには、博士論文と同様、顧客や市場に対して、「自分が正しい」と自信をもって発表・発売出来るような商品を開発していこうと思います。自信をもって「社会の役に立つ商品」を発表できるように努力していきたいと思っています。

今は構造設計業務をしていて、図面を書いたり、商品が問題なくできているか評価したりしています。大学時代にほとんどしたことのない仕事ですが、早く仕事を覚えて貢献できるようになりたい、その一心で日々精進していきたいと思っています。

■ 最後に

最後となりましたが、授賞の評価をして下さった審査員の皆さまや本賞を作って下さり、また私の学生生活を5年間に渡り奨学金で支えて下さった榎の芽会の関係者のみなさまに対してお礼を述べたいと思います。

この度は、どうもありがとうございました。今後、少しでも大きな榎の木に成長できるよう、日々努力を積み重ねてまいりたいと思います。

(No.4513 大阪大学大学院 株式会社キーエンス)



学位授与式のあと学友と研究室にて